

韓統連大阪通信紙

自主

チャジュ

383号

2023年2月号

자주

発行 在日韓国民主統一連合
(韓統連) 大阪本部

〒544-0034

大阪市生野区桃谷3-13-6

TEL06-6711-6377 FAX06-6711-6378

毎月1日発行 購読料 年間3000円

郵便振替 00940-7-314392

民族時報社 大阪支社

自主統一勢力の躍進で、ゆるやかな連邦制統一をきりひらこう！

尹錫悦政権の登場により、世界を感動させた2017年のキャンドル革命は未完の革命に終わった。今、私たちの最大の課題は、未完の革命、キャンドル革命の完遂だ。

●未完の革命、キャンドル革命の完遂を！

1960年、李承晩政権を退陣に追い込んだ4月革命が、1961年の5・16クーデターにより未完の革命に終わった歴史が繰り返されたかのようだ。4月革命もキャンドル革命も革命の果実は親米保守政権の無為無策によって実を結ぶことなく反革命勢力の再執権を招いてしまったのだ。

あらためて昨年の韓国大統領選挙敗北の最大の原因は何か。それは文在寅政権に対する幻滅と失望だ。2017年、キャンドル革命の歓声の中で文在寅政権は誕生した。過去2代の民主政権、金大中政権も盧武鉉政権も大統領選挙で当選したものの親米独裁勢力の手を借りた薄氷の勝利だったが、文在寅政権は民主陣営単独の力で大統領選挙に圧勝した。当選直後の支持率は70%を優に超え、南北首脳会談で4・27板門店宣言、9・19平壤共同宣言を発表した直後は80%を超える驚異的な支持率を獲得した。この圧倒的な国民の支持を背景に南北合意を履行さえしていれば南北関係は劇的に好転し、南北鉄道の連結など南北協力事業の推進により韓国経済も画期的な発展を遂げただろう。昨年の大統領選挙も民主陣営の圧勝に終わったはずだ。

アメリカの圧力に屈して南北合意を履行せず、親米独裁勢力の抵抗を前に国内改革も推進せず、国民に失望と幻滅のみを与えた文在寅政権こそが

尹錫悦政権の生みの親と言える。親米保守勢力の限界が改めて明らかになったのだ。

●公安弾圧で継続執権を画策する親米独裁勢力

2022年5月に出帆した尹錫悦政権は、対外的には「米国への追従、北との対決、日本への協力」姿勢を堅持する一方、国内では新自由主義に基づいた親資本・反労働の政策により民生破綻を招き、検察を利用した政治は民主主義を破壊している。進歩民衆勢力には国家保安法による公安弾圧を加え、前政権の文在寅政権と前政権時の与党である第一野党「共に民主党」への攻撃とあわせて、反対勢力を徹底して封じながら、2027年大統領選挙で保守政権の継続執権を実現することを念頭にした、2024年総選挙勝利のための整地作業を画策している。



▲尹政権の進歩陣営に対する公安弾圧を糾弾する韓国の進歩団体代表

●自主統一勢力の躍進で

自主的民主政府を樹立しよう！

キャンドル革命の完遂に向けた私たちの課題は何か。簡潔に表現するならば、①親米独裁勢力を決定的に弱体化させ、②親米保守勢力の限界を明らかにし、③自主統一勢力の躍進を勝ちとることだ。そうして2027年の大統領選挙で、自主統一勢力と親米保守勢力の連帯の下、親米独裁勢力を圧倒して自主的民主政府を樹立するのだ。そして自主的民主政府の下で、アメリカの干渉をはねのけ、親米独裁勢力の抵抗を乗り越えて、4・27板門店宣言と9月ピョンヤン宣言を着実に履行していくことにより、わが祖国はゆるやかな連邦制統一時代の幕開けを世界に宣言することになるだろう。進歩・民主陣営の団結した力で新たな時代をきりひらこう！（金五）

2023年も協力しながら

自主・民主・統一運動を推し進めよう！

韓統連・韓青大阪

本部・支部常任委員合同新年会

2023年を迎え「韓統連・韓青大阪本部支部常任委員合同新年会」が1月7日（土）、新京愛館（大阪市生野区）で開かれた。

新年会では、金隆司（キム・ユンサ）韓統連大阪本部代表委員が乾杯挨拶を通じ「昨年はいろいろな取り組みを通じて成果を残してきました。特に10月の国内団体による招請事業に韓統連の代表団が参加し、国家人権委員長などとの面談を通じ国家保安法の撤廃を訴えるなどの成果を残しました。今年も皆さんと協力しながら様々な活動を行い、前進していきましょう」と語った。



▲今年の抱負を語り合う参加者

その後、韓国料理を食べながら、本部・支部常任委員同士が親睦と交流を深めるとともに、参加者全員から今年の抱負が語られ、2023年も自主・民主・統一運動を推進していくことを確認した。

翻訳資料①

6・15南側委員会など「平和実現のために共に行動しよう」

「この危機を心配しながら、そのままにしておくことはできない。平和を言うのが難しい時期ほど、平和を叫ぶ声はさらに大きくなければならない」。

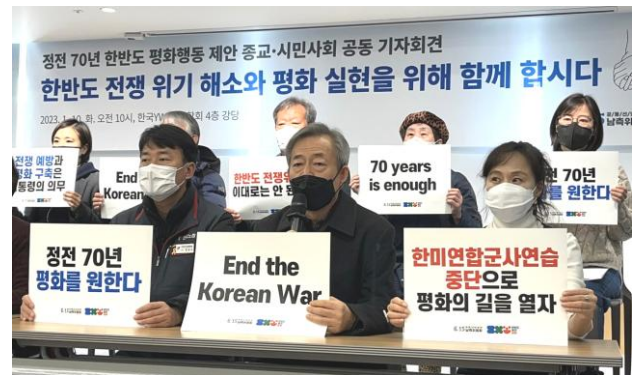
6・15共同宣言実践南側委員会と韓半島終戦平和キャンペーンは10日、韓国YWCA連合会で記者会見を開き「2023停戦70年、朝鮮半島平和行動」を全国の団体と市民に提案しながら、このように強調した。

彼らは「戦争の不安でいっぱいの新年度。朝鮮半島の軍事的危機が出口なしに悪化している。尹錫悦大統領は“圧倒的な戦争準備”“9・19軍事合意効力停止検討”などの発言を続け不安をさらに助長している。統一部も拡声器設置や宣伝ビラ散布許容など、南北の境界地域で衝突を招く可能性のある措置に言及して緊張を高めている」と現状を懸念した。

また「今年2023年は朝鮮戦争停戦協定締結70年になる年だ。しかし、70年間続いてきた不安定な休戦状態でさえ、今後はこのまま維持されるか分からない」とし「戦争反対と平和実現を叫ぶ声が、各界市民社会団体の努力がこれまで以上に切実な瞬間だ」と平和行動を提案した。彼らは今日を皮切りに共にする団体と市民を集めて2月14日、平和行動発足記者会見を計画している。

平和行動は朝鮮半島の戦争危機解消と平和実現のための活動に注力する計画だ。具体的に▲朝鮮半島における戦争反対と平和実現のための集中署名運動、▲上半期韓米合同軍事演習、韓米日軍事協力中止促進活動、▲国内200の市・郡・区及び全世界300ヶ所同時平和行動、▲7月22日大規模平和集会・行進などだ。

記者会見参加者たちは「今までになかった戦争危機を、今までになかった広く強固な連帯と共同行動で克服し、再び平和の道を開こう」と訴えた。



（韓国インターネット新聞 自主時報 1/10 付）

【翻訳資料②】 光州全南歴史正義平和行動(準)など「対日屈辱外交中止」を促す

光州全南歴史正義平和行動(準)などは1月31日、強制動員問題解決に関する韓日局長級会談に対する記者会見を開きました。今回、記者会見文の要約を掲載します。

尹錫悦政府の対日低姿勢外交が日を迫うごとに見苦しい限りだ。

韓日両国が30日、外交部庁舎で局長級協議を開催して日帝強制動員問題を論議したが、接点を見いだせなかったことが確認された。

先に政府は1月12日、形式的な公開討論会を開催して、加害者である日本企業に代わって行政安全部傘下の「日帝強制動員被害者支援財団」が韓国企業などから寄付金を募り、被害者らに支給する方案を公式化した経緯がある。

このような奇怪千万なことが、どこにあるというのか？加害者が膝をついて謝罪してももの足りないのに、加害国の責任を被害国が代わって抱え込む、一言でいえば「通りかかった牛も笑う(呆れる)」ほどだ。

亡国的方案を解決法だとした尹錫悦政府は、国民に顔向けができないのか「日本の誠意ある呼応」を要請しているが、日本はいまだ微動だにしていらない。

まず、最初から大変恥辱的だった。大法院が戦犯企業である三菱重工業など日本の被告企業に対し賠償命令を下したにもかかわらず、当該企業は判決から5年が経過したのに、うんともすんとも言っていない。さらにあきれるのは尹錫悦政権だ。尹政権は大法院の賠償判決を黙殺して、日本側に「誠意ある呼応」を求めている。判決を迅速に履行するよう求めても履行しないのに、拝むように「誠意」表明を乞い求めるのはいかなるものか。

あらためて言うが、日本被告企業は大法院の判決に従って賠償命令を迅速に履行しなければならない対象であり、「誠意」を乞い求めたり「呼応」を頼む対象ではない。

わが政府のこのように一般常識にも劣る低姿勢外交につけ込み、日本政府は求償権の放棄覚書ま

で要求するありさまだ。すなわち今後、日本企業に賠償金返還を求めないことを保障せよというのだ。

あきれてもものが言えない、一言でいえば債務者が債権者に債権放棄覚書を求めているのだ。いつから大韓民国の外交がこのようになってしまったのか？いったい尹錫悦政権は何をそんなに急いで加害者と被害者が入れ替わるような恥辱を自招しているのか？

わが政府は日本側に誠意表明の一つとして謝罪表明を求めているようだ。共同通信など日本のマスコミによれば、日本政府は日本被告企業に代わって韓国の財団が寄付金を支給する方案が確定す

れば、以前の政府談話を継承することに言及することを考慮する用意があるとのめかしている。事実、植民地支配について痛切な反省を込めた1995年の村山談話など、この間謝罪表明がなかったわけではない。

しかし、これらの談話には

限界があるのは明白だ。すなわち反省を語っているが、ただの一度も不法行為を認めたことはなかったという事実だ。再言すれば、わが政府が日本側に「既存の談話を継承する」と宣言してくれることを声をからして乞い求めているが、これは「強制動員は違法行為でなかった」との日本政府の主張を再確認することに他ならない。このような談話を再三求めることに何の意味があるのか。

振り返ってみよう。韓国司法部の決定を5年間も古靴を捨てるかのような扱いをしながら「こちらのいうことを聞け」式の行いが、果たして謝罪と反省をする態度なのか？痛切に反省するならば、今すぐ被害者に謝罪し、判決通り賠償を履行すれば済むことだ。

尹錫悦政府は自国被害者の名誉回復と人権保護のための政府なのか？加害国日本のために働く政府なのか？民族の自尊心を踏みにじり、被害者を侮辱することになるのはもちろん、世界的な嘲笑の的になる亡国外交、屈辱外交を直ちに止めろ！

2023年1月31日

光州全南歴史正義平和行動(準)



▲尹政権の屈辱外交を糾弾する記者会見参加者

【投稿】

この社会から差別はなくなるのか ～間違った対朝鮮観が変わるためには～

「差別がなく、多様性が認められ、あらゆる人権が尊重される社会」。今、この日本社会で、こうした文言を表立って否定する人はなかなか見つけにくいし、また、こうした社会像が一般的に肯定されるようになってきたのは望ましいことである。

ただ、その一方で私にとっては、なんとも釈然としない、いや、むしろムカムカとした思いが同居している。というのも実際の私たちの身の回りでは、これまでこの日本で社会的不利益を受けていた人たちに対する差別的な言動、行動の横行が一向に止むことなく、言わば建前と実相の乖離がますます広がっているからである。

「差別したらだめですよ」
「あの人のありのままを受け入れましょうね」という言葉だけで差別がなくなり、人権が尊ばれる社会ができるなら世話はない。大切なことは、そうした言葉の先にある作業、

すなわち「人のありのまま」を構成する、その人の正確な社会関係、背負ってきたもの、本来の矜持に至るまでを知るための教育的な関係とそれに伴う努力が必要であり、そうした関係や努力を支える環境や援助こそが、前述の美辞麗句を連発する政治や行政に求められるのである。

近年、そうした意味からの私たち朝鮮人に対する日本の政治、行政の関わり方は明らかに後退（むしろ逆行）しており、不安と危機感がつのるばかりだ。

そう感じていた折り、数々の差別的言辞で世間を煽ってきた杉田水脈総務政務官（当時）が国会で非難を浴び、またその模様についての北原みのり氏の論評が目にとまった（AERA dot. 連載「おんなの話はありがたい. 昨年 12/21 付」をご覧ください）。

この論評を私なりにとらえた内容は、大略以下の通りである。

一もともと特段の思想的背景も見当たらない杉田氏を確信犯的なレイシストに育て上げたのは、

煽る彼女を持ち上げた社会そのものであり、その言動、主張の核が「慰安婦」問題であり、歴史問題であることから、ついに安倍晋三氏の導きによって彼女は政界の上位にまで押し上げられた。国会で野党議員から彼女の差別的な言動に対する激しい追求がされたが、ついで杉田氏の歴史認識と言動に対する追求、言及はなかった。「慰安婦」問題に対する（政治、メディア、一部大衆運動などの）歪んだ向き合い方は、この国の人権問題や性暴力問題、歴史に対する向き合い方を後退させてしまった。今、またその問題の核心に踏み込まないまま、結局は杉田氏のような人物を再生産してしまうことにつながりかねない。

案の定と言うか、昨年12月27日に政務官を辞任し「自由の身」になった杉田本人は、国会議員のバッジを保持したまま、最近再び吠え始め、誤った歴史認識や韓国パッシングを堂々と吹聴している。

その姿は矢面に立つ官職から離れ、羽根を生やしたかのようにすら見える。結局、任命した岸田首相も、杉田本人も何らの責任も取っていない。

日本、韓国ともに今、政治のレベルは大きく後退していると考えられる。ならば、それにどのように歯止めをかけ、反撃していくのか。心ある人とバラバラにならずさらにつながりを求め、知るべきことを知り合える関係づくりを、丁寧に、そしてサボらず築き続けていくことに糸口を見出していくしかない。（範）



▲差別発言を繰り返す杉田水脈議員(右側)



【コラム】

壬辰倭乱で奴隷として連れ去られた人々

アメリカ・カリフォルニアにある J・ポール・ゲティ美術館には『朝鮮服を着た男 (Man in Korean Costume)』という素描が所蔵されている。作者はピーター・パウル・ルーベンス(1577～1640)。1617年頃に描かれたとされている。左下の背景に大きなマストを備えた帆船がかすかに描かれているが、これは遠い異国の風景であることを示唆したのだろうか、はたまた人物が遠い異国から来た人であることを強調したのだろうか。

その服装は白い民族衣装(天翼・チョルブ)と朝鮮王朝時代の両班が被っていた冠帽であり、おそらく当時の朝鮮人をそのまま描いたものであろう。この人物は壬申・丁酉倭乱の際に日本軍に捕まえられ、後にイタリアの商人フランシスコ・カルツィに奴隷として売られたアントニオ・コレアであると言われている。

フランシスコ・カルツィは旅行記を残しており、世界一周の途中で立ち寄った長崎で、少年五人まとめて石叡五個分(12シリング)という安価で購入した内の一人がアントニオ・コレアだと記している。彼はマカオ、そしてインドのゴアを経て1606年にフィレンツェに渡り、間もなくローマへ移ったそうだ。彼は史上初めてヨーロッパに渡った朝鮮人とされている。

そもそもアントニオ・コレアは、なぜ奴隷として日本で売られたのだろうか。この背景には当時の日本の豊臣秀吉が大名たちに命じて朝鮮を侵略した壬辰・丁酉倭乱がある。この時、多くの朝鮮人が日本に連行され、奴隷として売られていった。

1592年と1598年の2回にわたって日本の軍兵が朝鮮に攻め込んできた壬辰・丁酉倭乱は、特に朝鮮南部の人々に果てしない苦しみを与えた。日本兵が敵を討ち取った戦功の証と称して、一般民衆を村ごと撫で斬り(皆殺し)にして、その耳や鼻を削ぎ落とし、日本に持ち帰ったものが京都

の耳塚として今も残っていることは有名だ。

そして多くの人々が奴隷として連行(乱取り)されていった。技術や学識に長けた人々は、朱子学を論じたり、陶工として働くなどしたが、一般の人々の多くは労働力として働かされ、一部はさらに奴隷として海外へ売られていった。当時、医僧として日本兵に従軍した真宗僧の慶念が残した『朝鮮日々記』にはこう書かれている。

「日本よりもよろずの商人も来たりしたなかに人商いせる者来たり、奥陣より後につき歩き、男女・老若買い取りて、縄にて首をくくり集め、先へ追い立て、歩み候わねば後より杖にて追い立て、打ち走らかす有様は、さながら阿坊羅刹の罪人を責めけるもかくやと思いはべる」(『朝鮮日々記』)。

日本に連行された朝鮮人は少なくとも5万人以上とされている。しかし、後の徳川政権と交渉して刷還(帰還)したのは1万人にも満たない。ポルトガルはゴアやマカオで奴隷市場を作り、アジアやアフリカからヨーロッパへ繋がる奴隷貿易を運営していた。海外の朝鮮人奴隷はこうした奴隷市場で売買され、もし解放されたとしても帰国するすべなど無かつたろう。

イタリア・カラブリア州にアルビという山村がある。直接の繋がりを示す記録は無いが、ここに住むコレア姓の人々がアントニオ・コレアの子孫であると言われている。このコレア姓をルーツとする有名人は、ミュージシャンのチック・コリア(本名アルマンド・アンソニー・コリア)だという。(好)



『朝鮮服を着た男』
ピーテル・パウル・ルーベンス



【書籍紹介】

潔く汚れなく穏やかに ～我が愛おしき家族への手紙～

著者:李民實

発行所:満天堂／定価:1000円+税

ある日突然「不治の病」を宣告されたら、人はそれをどのように受け止め、どう行動するだろうか？

本書は「不治の病」を宣告された在日朝鮮人医師の家族への手紙である。

呼吸器疾患の専門医である著者は、一昨年の11月末に自身のクリニックで肺癌を知った。そして12月上旬に肺癌が脳にまで転移した末期であることを宣告される。

この時の衝撃は想像を絶するものがあるだろう。しかし著者は、さまざまな葛藤を経ながらもある誓いを立てた。「余命を世に恥じぬよう潔く、汚れなく、穏やかに、そしてかっこよく力の限り生き抜いてみよう」と。悟りの境地に達したかのようなその誓いの結実が、厳しい闘病生活（抗癌剤治療）の中で書き上げた本書である。

著者は在日朝鮮人の最大の密集地域である、大阪市生野区猪飼野

(※イカイノ)で6人兄弟の長男として生を受けた。著者の両親は済州4・3民衆蜂起の混乱の中、九死に一生を得て日本に渡り、父は南朝鮮労働党(南労党)の党员であったことを晩年に著者に語る。

厳しい経済事情の中で神戸大学の医学部に合格するが、東京に在住する両親からの仕送りを一切受ける事なく、アルバイトと奨学金で6年間の学生生活を大学の寮で過ごした。学生時代は留学同で熱心に活動し、「祖国の自主的平和統一のために自己の生を捧げなければならない」という信念は今も変わりが無い。卒業後は生野区の共和病院で同胞医療の発展に貢献し、在日本朝鮮人医学者協会(医協)の活動にも精力的に携わる。

本書は家族への手紙であるが、分断時代を生きる在日朝鮮人二世の医師の物語でもある。著者の純粋で誠実な生き方は、読者に深い共感と感動を呼び起こすだろう。

著者は詩人の金時鐘先生と康宗憲氏を尊敬し、思想的に最も近い韓統連の支援者でもある。

昨年(2022)の6月、3年ぶりに開催された第27回統一マダン生野の会場に家族とともに足を運び、開会から閉会までの長時間、中央の前の席でじっと舞台に見入っていた。フィナーレでは「ウリエソオン(私たちの願い)」を輪の中に入って涙をこらえながら合唱した。

本書は朝鮮半島の平和と統一を願うすべての人々へのメッセージでもある。

著者は「末期肺癌の状態になって嘘偽りなく心から良かったと感じている」と述べている。医師として多忙な日々を過ごしてきた時には見えなかったものが見え、一輪の花に眩しいほどの光を感じるようになったという。

著者は超人になったのかもしれない。私は超人が奇跡を起こし、祖国統一の日まで生き抜いてほしいと切に願う。(隆)

*** **

毎日を人生最後の日のように生きる人は、明日を待ち望むことも

明日を恐れることもない。<セネカ>

※猪飼野(イカイノ)は大阪市東成区、生野区にまたがる平野川流域地域の旧地名。当時は「日本国猪飼野」で韓国からの郵便が届いた。1973年に住所表示変更により消滅。

編集後記

強制動員(徴用工など)問題が韓日政府間では「解決」の方向へと進もうとしているが、韓国の被害者はもちろん被害者支援団体、市民社会団体などから「尹政権の屈辱外交糾弾」の声が上がっている。内政・南北関係・外交、どれをとっても不満の声しか上がらないのが今の尹政権。(ソン)



